



憧れの姿を目指して

3月3日、鹿島医師会附属准看護学院（2年制）から26人の准看護師が巣立っていきました。准看護師として病院に勤務または正看護師を目指し新たなステップに進むなど、どんな看護師を目指しているのでしょうか ——

行動に移せる看護師に

「看護師だった母の背中を見て、小さい頃からの憧れだった。一番下の子の就学を機に、看護師の道を目指した」と話すのは、3月に卒業した堀川優花さん。3人の子を育てつつ、同時に療養型病院に介護職として週3日勤務しながら学びました。

「コロナ禍でも先生たちが病院と調整し実習もできた。しかし、患者さんから直接、痛みや不安・不調を聴き、その状態を分析・判断するアセスメントなどの実習が制限されるなど、通常とは違い大変だった」と振り返ります。その中には忘れられない患者さん自身のお子さんが「どう思うのか」と悩んでいるのを知り、「子育て中の自分と重なり、寄り添っていけるようになりたい」と強く思った」と話す目はうつつすらと涙が。

卒業後、病院で勤務する堀川さん



鹿島医師会附属准看護学院
第37期卒業生 堀川優花さん

に、どのような看護師になりたいかを伺うと「コミュニケーションと笑顔を大切に、一人ひとりの患者さんの想いを受け取って行動に移せる看護師になりたい」と即答。続けて「熱心に指導してくださる先生ばかりで、この学校に入ってよかった」と笑顔を見せました。

理想の看護師になるために

高校時代に、友人のお見舞いに行った病院で、看護師さんの技術やコミュニケーションなどの接し方を見て感銘を受け、准看護学校に入学した高安七瀬さん。

入学当初は医療の知識がなかったそう。で、「周りについていけないか不安だった。しかし、日々勉強に励み、同期や先生方に恵まれたことで卒業することができた」と振り返ります。

また、高安さんには患者さんとの接し方を考えさせられた実習がありました。それは、長期の治療を続けている

「慢性期」に該当し、病気で塩分・食事制限がある患者さんを受け持たせてもらったときのこと。「食事制限がある患者さんでしたが『食べたい』思いが強く、『制限がある』ことを理解してもらえなかった」という経験を明かすなど、伝え方や接し方、コロナ禍でのコミュニケーションの難しさを痛感する実習を多く経験しました。

卒業後は、「その人らしさを生かしつつ、今、その人にとって何が必要なのかを考えられる看護師を目指し、さらに学ぶため正看護師の学校に進学する」と力強く答えます。

コロナ禍での実習では「コミュニケーション」が一番勉強になったと口を揃える2人。これからさらに実践経験を踏み、理想とする看護師への道を歩み始めます。



鹿島医師会附属准看護学院 第37期卒業生 高安七瀬さん